（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表

○事業所名	こどもプラス豊見城教室４号館			
○保護者評価実施期間	令和8年3月1日	～	令和8年3月31日	
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	37	（回答者数）	37
○従業者評価実施期間	令和8年3月1日	～	令和8年3月31日	
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	11	（回答者数）	11
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年3月31日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	利用者一人ひとりの発達段階や生活背景を踏まえた個別支援計画を軸に、専門性を備えた職員が実践を積み重ねている。また、保護者との対話を通じて支援の意図や方向性を共有しながら、家庭と連動した支援体制を築いている点が強みである。	支援計画の策定にあたっては、日々の観察や振り返りを重ねながら、こどもの変化や背景を踏まえた目標設定を行っている。また、職員研修や事例検討を通して専門性の向上を図りつつ、保護者との対話を継続することで支援の方向性を共有している。	今後は、個別支援計画の内容を定期的に振り返り、目標や支援方法の見直しを丁寧に行っていく。また、研修や事例共有を通じて職員の専門性を高め、保護者との対話を重ねながら、家庭と支援のつながりをより確かなものにしていく。
2	子どもたちが安心感をもって過ごせる環境を整え、日々の関わりを通して安定した支援の基盤を築いている点が強みである。情緒面への配慮を大切にしながら、落ち着いた雰囲気の中で継続的な支援が行われている。	子ども一人ひとりの状態や気持ちの変化に目を向けながら、活動内容や関わり方を柔軟に調整している。また、見通しを持ちやすい環境設定や声かけを意識し、安心して活動に参加できるよう支援している。	今後は、子どもの状態や集団の動きに応じた環境調整をより丁寧に行い、安心して過ごせる時間の質を高めていく。また、活動の選択肢を広げながら、一人ひとりが自分のペースで参加できる仕組みを整え、安定した支援を継続していく。
3	子どもたちが自ら挑戦しようとする姿勢を育む支援を重ねている。段階的な目標設定により達成の実感を積み重ねるとともに、その過程や成果を共有することで自己肯定感の醸成につなげている。また、保護者との継続的な情報共有を通して支援方針の理解を深め、家庭と歩調を合わせた支援環境を築いている点が強みである。	子どもが達成を実感できるよう、段階的な目標を設定し、小さな成功を積み重ねられる関わりを行っている。また、活動の中で見られた成長や努力を丁寧に伝えることで、自分の力に気づけるよう支援している。さらに、その様子を保護者と共有し、家庭での関わりにもつなげている。	今後は、子ども一人ひとりの達成経験をより丁寧に積み重ねられるよう、目標設定や関わり方を見直していく。また、活動の中で育まれた自信や意欲が継続していくよう、保護者との情報共有を深めながら、家庭との連携を一層意識した支援を進めていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者とのコミュニケーションの機会が十分とは言えず、保護者同士が情報交換や連携を図る場も限られている。結果として、事業所の活動内容や支援方針への理解を深める機会が十分に確保できていない点が課題である。	放課後等デイサービスでは、日々の送迎や個別対応が中心となるため、保護者同士が自然に交流できる機会が生まれにくい。また、支援に関する情報共有も個別連絡が主となり、横のつながりを意識的に設ける機会が少なかったことが要因と考えられる。	今後は、保護者が参加しやすい形で保護者会を開催し、事業所の活動内容や支援方針を共有する機会を設けていく。また、保護者同士が情報交換できる場を意識的に整え、横のつながりが生まれる環境づくりを進めていく。さらに、保護者からの意見や要望を丁寧に受け止め、支援の質の向上につなげていく。
2	地域との関わりが限定的であり、地域資源や人材を活用する機会が十分とは言えない。その結果、利用者が地域社会と接する経験の幅が広がりにくい点が課題である。また、地域との接点が少ないことにより、事業所の活動や役割が外部に伝わりにくい側面もある。	日々の支援が事業所内での活動を中心に展開されていることから、地域との接点を意識的に設ける機会が十分ではなかった。また、地域資源や外部団体との情報交換の場を継続的に持つ仕組みが整っていなかったことも要因の一つと考えられる。	移転を機に、自治会への挨拶を行うなど地域との関係づくりを進めている。今後は、地域の行事や活動への参加の可能性を探りながら、利用者が地域社会と接する機会を段階的に広げていく。また、地域との情報共有を重ねることで、事業所の活動や役割についても理解を深めてもらえるよう取り組んでいく。
3	利用者の年齢層が幅広いため、活動プログラムや支援内容の設計において、すべての年齢層に十分に応じきれない場面がある。特定の発達段階に合わせた活動に比重が寄ることで、他の年齢層のニーズへの対応が薄くなる可能性があり、支援のバランスをどのように保つかが課題となっている。	利用者の年齢幅が広いことにより、活動内容や支援目標の設定において求められる発達段階が多岐にわたっている。そのため、全体活動を中心としたプログラム設計では、それぞれの年齢層に最適化することが難しくなる場面が生じていることが要因の一つと考えられる。	活動内容を見直し、発達段階や興味関心に応じた選択肢を取り入れていく。例えば、パソコン操作など年齢に応じた活動も組み込みながら、全体活動と個別的な関わりのバランスを意識した支援を進めていく。